横須賀総合高等学校における新しいハウス制の提案・計画

PROPOSAL AND PLANS FOR NEW HOUSE SYSTEM IN YOKOSUKA HIGH SCHOOL

船越 徹 —*1 寺嶋修康 —*2
諏訪泰輔 —*3

Tohru FUNAKOSHI —*1 Nobuyasu TERASHIMA —*2
Taisuke SUWA —*3

キーワード：
総合学科，ハウス制，異年次集団

Keywords：
Comprehensive curriculum, House system, Multiple-grade grouping

This is a report on a plan for a new comprehensive-curriculum high school being constructed to combine three existing high school facilities. The authors proposed a new "house" system as a means of providing students with an enriched school lifestyle. This article describes how students are grouped in the house system and how the system operates, as well as the spatial composition characteristics of this system.

1. はじめに

横須賀市は1998年に横須賀市立横須賀総合高等学校（以下、横須賀総合高等学校）の公開エスキスコンペを実施した。39点の応募案の中から筆者らの案が最優秀案に選考され、設計・監理を担当することとなった。

横須賀総合高等学校は現在の市立横須賀高等学校（普通科）、市立商業高等学校、市立工業高等学校の3校を統合し、総合学科の高等学校として新設される。1998年12月から1999年9月までの基本計画、基本設計の期間、ソフト（運営）とハード（建築）を整合させるため、横須賀市教育委員会総合高校準備室・既存の3校の教職員と度重なる討論を行った。エスキスコンペで提案したハウス制に対する教職員の意見はおよそ賛成と反対とが半々であった。イメージを共有するためにイラストや模型を使って1日の学校生活の様々な場面を説明し、空間構成と併せて生徒や教員のグループ構成やハウスの運営方法などソフト面にまで踏み込んだ提案をした。討論は実施設計期間にまで及んだが、最終的には筆者らの提案が受け入れられた。

工事は2002年10月に1期の校舎棟と管理棟が完成した。準備期間を経て、2003年4月に開校する。その後、2期工事に着手し、2005年春に全体が完成する予定である。本稿は、横須賀総合高等学校に関する新しいハウス制の提案と計画の概要について報告する。

2. 総合学科とは

総合学科は高校教育の個性化・多様化・弾力化を基本方針に、平成6年度に普通科・専門学科に加え第3の学科として創設された。普通教科から専門教科にわたる多様な開設科目の中から生徒が自由に学ぶ科目を選択できること、進路に関する学習が重視されていること等を特色としている。必修科目・原則履修科目・総合選択科目・自由選択科目で科目が構成され、必修科目は、通常その多くを1年次で履修する。選択科目が多いことが特徴で、それをわかり

図1 横須賀総合高等学校 配置図

表1 横須賀総合高等学校

クラス数	全日制 定員960名(24クラス)
	定時制 定員280名(8クラス)
敷地面積	25,597㎡
延床面積	24,202㎡
構造規模	RC+PC造、一部S造 地上3階建
1期工事	校舎棟 16,381.5㎡
	管理棟 2,408.2㎡
2期工事	体育館 2,927.8㎡
	講堂・格技室棟 2,484.4㎡
グラウンド	市立工業高校跡地を整備して使用する
設計・監理	船越徹+アルコム
協力事務所	構造：構造設計集団SDG 設備：テーテンス事務所

*1 ㈱アルコム 代表, 東京電機大学 名誉教授・工博
(〒107-0062 東京都港区南青山4-15-8)

*2 ㈱アルコム 副代表

*3 ㈱アルコム 所員・工修

*1 President, ARCOM R&D Architects
Emeritus Prof., Department of Architecture, Tokyo Denki University,
Dr. Eng.

*2 Vice-President, ARCOM R&D Architects

*3 Architect, ARCOM R&D Architects, M. Eng.

易く導くために各学校で「系列」を設けている。系列は学科やコースなどのような生徒がそのいずれかに属するという性格のものとは違い、履修上の指針であり、標準的な参考例である。進路選択について普通科・専門学科と総合学科を比較すると、前者では生徒はすでにある方向性を決めた上で特定の学科やコースに入学しているのに対し、総合学科では入学後の高校生活の中でその選択をするという違いがある。また、他の高校・大学との連携、地域・産業界との連携、社会人講師の活用などを積極的に行う、開かれた体質を特徴とする学科である。

3. 教科クラスター

横須賀総合高等学校では教室ゾーンを8つのクラスターで構成した。3棟各3層、合計9フロアの内、情報クラスターのみが2層にまたがる。各クラスターは、関連の深い教科の教室とラーニングスペース（自習室）、教科センター（教科職員室）で構成される。各々の位置関係は横須賀市が想定した8つの系列に関連した人と物と情報のつながりから決めた。単位制であるため、運営方式は教科教室型とした。カリキュラムは生徒の履修希望が反映されて年毎に変わる。学習集団の大きさが一定ではなく、少人数の授業が多くなる傾向があるため、教室の数が多く必要になる。限られた規模の中で施設を有効かつ柔軟に使用するため、固定設備の少ない教室（講義室）の間仕切に遮音性スライディングウォールを使用し、教室の大きさと数を必要に応じて変えられるつくりにした。主として1年次で履修する必修科目の授業についても、教科にふさわしい施設と教材を利用した質の高い授業をするため、また教科教室型の生活リズムに慣れるためにも教科教室で授業を行うことを提案している。単位制・教科教室型により、授業においては「クラス単位」・「年次別¹⁾」が実質的にかなり解体されて「個人単位」になっていく。また従来の様な専用のHR教室や個人専用の机を持つ事が難しくなる。

4. ハウス

4-1. ハウス制・ハウスの考え

ハウス制とは何か。これに近いものに Schools within a School と呼ばれる概念がある。大きな学校の中に小さな学習・生活集団をつくることで、アメリカやイギリスに事例がある。佐藤学氏²⁾ はある座談会³⁾ で、「ひとつの学校を150人ぐらいの単位にし、教師組織も10人ぐらいにして、ひとつひとつの組織を完全に独立した学校にしてしまう。」と説明している。アメリカでこれを導入した高校の中退率が激減した理由を同氏は「スモールコミュニティをつくったからだ」と述べている。また、同じ座談会の中で溜昭代氏⁴⁾ は、これからの学校のコミュニティにおける、より低年齢層から異年齢同士のタテのつながりが重要であることを示唆している。

一般に、大規模校では選択授業の巾を広くし易いが、教師と生徒、生徒相互の親密な人間関係を築きにくい。互いの顔と名前さえ一致しないような事さえる。一方、小規模校では教師と生徒、生徒相互に比較的親密な人間関係を築き易いが、選択授業の巾に制約がしやすい。総合学科の場合、選択授業の巾の広さは学校の魅力であるため、学校規模は大きくなる傾向がある。

筆者らは、ここで提案したハウス制及びハウスを以下のように独自に考えている。

写真1 ハウスの外観

図2 教科クラスター 平面図

ハウス制とは、運営上の理由で学校規模が大きくなった場合に、生徒の学校における生活面の充実のために中規模、小規模の異年齢集団つくることである。ハウス集団は教科学習における集団とは別の集団である。またハウスはハウス制を実践していく上での集団のための専用空間である。

ここに提案したハウス制は、大規模校の教科面での有利さと、小規模校のスモールコミュニティという双方のメリットをバランス良く活かしながら、更にタテの人間関係も含めて、生徒あるいは社会の個性化・多様化に対応する柔軟な学校をつくる可能性をもつ方法であると考えている。

アメリカでHOUSE制あるいはFamily制と呼ばれる学校の例をあげる。ミネソタ州にあるBlack Hawk Middle Schoolは6クラスの学年HOUSEを5つと混合のHOUSEを1つ持つ。HOUSE内に6科目の教科教室を持ち、日本の必修科目に相当するような基幹的な科目の授業はHOUSEの中で教科教室型で運営できる。同じくミネソタ州のMaple Grove Senior High Schoolはノン・グレードの4クラスのFamily Unitを12持つ。Family Unit内は可動間仕切りで適宜仕切って4つのクラスルームのまとまりをつくるなどFamilyによって使い分ける。次に日本におけるハウス制の取り組みの例をあげる。埼玉県立伊奈学園総合高等学校⁵⁾ は総合選択制の普通科高校で、12クラスの異年次ハウスを6つ持つ。各クラスはハウス内にホームルーム教室を持ち1年次は特別教室型、2年次以上は教科教室型の運営が行われている。早稲田大学本庄高等学院⁶⁾ は普通科高校

で、6クラスの学年ハウスを3つ持つ。各クラスはハウス内に専用の生活スペースを持ち、教科教室型の運営が行われている。この他にもホームベース・生徒ラウンジなどの呼称のクラス専用の生活スペースを持つ学校の例はいくつかあるが、学習ゾーンから明確に切り離されたクラス専用の生活スペースとともにラウンジの様な異年次の交流を目的としたスペースを持つハウスは、国内では横須賀総合高等学校が始めてのケースであろう。

4-2. 横須賀総合高校のハウス

横須賀総合高等学校でハウスを提案した理由は4つある。

① 学校生活上の拠点をつくる

学習面が「個人単位」になるのに対し、生活面では「クラス単位」を温存する。しかし、教科教室型では従来型のHR教室を確保することは難しいため、これに代わる生活上の拠点を学校の中につくる。

② 親密な人間関係を築き易い集団とその交流の場をつくる

総合学科では将来の進路や生き方を考えていくことが重要である。生徒は教師や他の生徒との親密なコミュニケーションを通じ、進路選択のための情報を得たり、考えを深めていく。コミュニケーションの質は集団の大きさと質に左右される。互いの個性が把握できる程度の大きさの集団で、多様な個性との交流から幅広い情報を得るのが有効であろう。このため、ハウスに所属する生徒の属性はできるだけ偏らないようにすべきであると考えた。ここでいう属性とは性別、進路、年齢、出身校、住所などを指す。原則として入学してから卒業するまで同じハウスに所属するのが望ましいと考えている。この他に、スモールコミュニティの中では非行・問題行動が発生しにくいということも挙げられる。

③ 一般社会に近い人間関係の中で社会性を身につける場をつくる

横須賀総合高等学校では異年次集団で構成するハウスを提案した。タテとヨコの人間関係をバランス良く経験できる場をつくるためである。従来の学校における生徒の人間関係は、管理上の効率を重視する教師の立場から、ヨコの関係が圧倒的に強い。この点で学校における人間関係は社会全体からみるとやや異質である。それは学校生活の良い面でもあるが、一方でタテの関係が希薄すぎるために社会への順応力が身に付き難い面もある。平成15年度からの学習指導要領の改正により、これまでタテの関係を補ってきた部活動は縮小していくだろう。こうした状況の中で、タテとヨコの人間関係のバランスは総合学科のみならず普通科や専門学科にも共通する問題である。また、総合学科は単位制であるため生徒は自分にあったペースで単位を取得することができる。その結果として多くなる過年度生の受け入れに対してもタテの人間関係の要素を採り入れることは有効であろう。

④ 主体性を身につけ、個性を発揮し易い環境をつくる

生徒会活動や各種の行事は生徒が担当する役割を通じて主体性を身につけ、個性を発揮するための良い機会である。しかし、大規模校では一部の生徒のみがその役割を担い、埋もれてしまう生徒も少なくない。生徒会活動についてはハウス単位に自治会（ハウス会）をつくり、個々の生徒が主体的に参加できる機会を多くすることを提案した。各ハウス会にある程度まで個別の運営を認めたり、体育祭をハウス対抗にするなど、学校行事をハウス単位で行うことにより、他者の存在を意識し、多面的なものの見方を育む環境ができるので

写真2 ラウンジ

図3 ハウス 3階平面図

図4 ハウス 2階平面図

表2 ハウス1つあたりの面積表

階	部屋名	面積
2階	ラウンジ	162.2㎡
	ミーティングルーム	49.3㎡
	談話室 (ハウス会室)	27.1㎡
	トイレ・更衣	22.2㎡
	その他	63.4㎡ (2階計 324.2㎡)
	合計	324.2㎡
3階	ホームベイ	34.2㎡ x 6
	教員室	30.6㎡
	トイレ・更衣	22.2㎡
	その他	103.0㎡ (3階計 361.0㎡)
合計		685.2㎡

はないかと考えた。

4-3. ハウスでの教師

教師もハウス集団の一員である。4つのハウスにはそれぞれ教員室を設けている。そこが進路指導、生活指導の拠点となる。

生徒の個性の多様化に対応し、教師の側にも柔軟な体制が求められる。ハウス毎に担当教科や個性等に偏りができないように教師のチームをつくり、生徒との間に多対多の関係をつくることが望ましい。生徒が移動を繰り返す総合学科の場合、進路指導や生活指導のために接触の機会をできるだけ多くつくる工夫が必要である。昼食などは所属するハウスで生徒と一緒に食べるのがよいだろう。教師の居場所はこの他に教科クラスター内の教科センターと管理棟の校務センターがある。校務センターでは主に職員会議や分掌事務などを行う。担当授業時間以外はハウス担当のコアとなる教師はハウスの教員室に、その他の教師は教科センターに居る時間が多くなる。

4-4. ハウスの空間

4つのハウスには、集団のつくり方を反映して外観上も個性を表すために球状の屋根を架けた。2階と3階で1つのハウスを構成する。スクール・ストリートに面する2階の入口がハウスの玄関である。ラウンジは住宅の居間に当たる共有スペースで、昼食や歓談の場である。ラウンジはハウス集会にも使用するため、240名全員が床に座れる広さがある。2階と3階は内部の専用階段で連続する。3階は住宅の個室に当たる6つのホームベイ（各年次2クラス）が並ぶ。ホームベイはクラス専用で、個人用ロッカーがあり、休み時間はここに戻り次の授業の準備をする。造付けベンチやスツールを使って40名が座れる広さがあり、ショートホームルームや空き時間の自習の場もできる。

5. スクール・ストリート

スクール・ストリートは全長約130m、3層吹抜けのガラスのアトリウムで、校舎の空間全体の把握をし易くする骨格的な空間である。授業の合間の気持ちを切り替える場であり、他のハウスの生徒との交流の場である。また外部から地域開放や学校間連携で訪れる人々との交流の場でもある。生活の場であるハウスと授業の場である教科クラスターをスクール・ストリートを挟んで対峙させた。スクール・ストリートを歩くと、色彩計画において別々のテーマカラーを配した4つのハウスと8つ教科クラスターの雰囲気を感じ取ることが出来る。

6. まとめ

今までの学校は管理のし易さから様々なことが決められることが多かった。しかし、これからは社会構造の変化と個性の多様化、また人間関係の多様化に対応するために柔軟な体質に生まれ変わる必要があると思う。横須賀総合高等学校は、これから使用段階に入る。実際の評価は、2期工事もあり、数年を要すると思われる。今後の運営についての観察を続けて調査・報告したい。

尚、設計に関しては筆者らの他に、吉池紀夫、堀内敏生、井上知也、水澤晶子、飯沼秀晴（元所員）が参加した。

写真3 ホームベイ

写真4 スクール・ストリート

参考文献

- 1) 文部科学省 総合学科の在り方に関する調査研究協力者会議：総合学科の今後の在り方について～個性と創造の時代に応える総合学科の充実方策～（報告）、2000年
- 2) 上野淳、柳澤要、鈴木賢一：近年の米国学校建築における学校分割の考え方、日本建築学会大会学術講演梗概集、pp. 221～222、1998
- 3) スクールアメニティー1999年9月号「アメリカの学校建築」、ポイックス

注

- 注1) 単位制においては、学年毎の課程の認定を行わず、卒業までに必要な単位を修得すれば卒業できる。年次はその時点での修得単位数に関わらず、入学年度によって決まる。
- 注2) 東京大学大学院教育学研究科・学校臨床総合研究センター教授
- 注3) SD 1999年7月号「学校が変わる、建築が変わる」、鹿島出版会
- 注4) 千葉市立打瀬小学校初代校長 現在千葉市教育センター嘱託
- 注5) 埼玉県伊奈市 基本計画：長倉康彦、船越徹＋アルコム 1982年
- 注6) 埼玉県本庄市 設計：早稲田大学徳積研究室 1983年竣工

[2002年10月18日原稿受理 2003年2月25日採用決定]